令和４年度　福岡県立大学　公開講座Ⅱ
報告書

シンポジウム

テーマ：「筑豊の炭鉱閉山期、『筑豊の子供を守る会』の活動を振り返る」

実施日　令和５年２月11日（土）　13：30～15：00

会場　　福岡県立大学大講義室（シンポジウム）

司会進行　　細井勇氏（福岡県立大学人間社会学部特任教授）

シンポジスト　犬養光博氏（2年目の「守る会」の活動から参加、1965年４月福吉伝道所を開設）

黒沼宏一氏（第４代「守る会」委員長）

櫻井秀教氏（第６代「守る会」委員長）

鬼塚香氏（福岡県立大学人間社会学部准教授）

座談会

実施日　令和５年２月11日（土）　15：10～16：30

会場　　福岡県立大学附属研究所大セミナー室（座談会）

1.　本講座の概要報告（細井勇［福岡県立大学人間社会学部特任教授］）

①　本公開講座の開催の背景

令和3年度～4年度にかけてのCOC研究「『筑豊の子供を守る会』関係資料集成の刊行に向けて」の取り組みの成果として、令和4年度に、「筑豊の子どもを守る会」関係資料集成全8巻を刊行することができました。編集委員会編として刊行したのですが、編集委員のメンバーは、COC研究のメンバーであった本学の細井勇、堤圭史郎、佐野麻由子、杉野寿子、陸麗君、鬼塚香の6名の外、資料の提供者舩戸良隆、黒沼宏一、犬養光博らを加えたメンバーでした。本資料集成は、「筑豊の子供を守る会」の活動と「福吉炭住での活動」に関する資料が中心を占めることになりました。そこで、今回、「筑豊の子供を守る会」の活動を振り返る公開講座を企画することになりました。「筑豊の子供を守る会」や「福吉炭住での活動」を中心的に担った関係者にシンポジストをお願いした次第です。本学の細井勇と鬼塚香は、本資料集成の解説の執筆者でもあるということで、それぞれシンポジウムの司会進行及びシンポジストを務めることといたしました。

※「筑豊の子供を守る会」とは

「筑豊の子供を守る会」とは、筑豊の中小炭鉱の閉山が集中した1959年に起こった黒い羽根運動の延長にありますが、それを乗り越えようとして1960年に活動を開始したキリスト教学生運動でした。1960年の夏のキャラバン活動は、日本キリスト教奉仕団によるミル

ク給食への協力であり、東京神学大学、国際基督教大学、立教大学、明治学院大学のチーム、全体で56人の学生が参加しました。これを契機に1961年2月、「筑豊の子供を守る会」を起こすことが決定されました。1961年夏（2年目）のキャラバン活動からは各大学チームが一定の炭住で2週間継続して子ども会活動を中心に取り組むことにしました。また、2年目からは新たに同志社大学や関西学院大学のチームなど加わることになりました。

歴代の「守る会」の委員長は以下の通りです。1961年度の初代委員長は船戸良隆（東京神学大学）、1962年度（2代目委員長）は李海竜（明治学院大学）、1963年度（3代目委員長）は山本将信（東京神学大学）、1964年度（4代目委員長）は黒沼宏一（青山学院大学）、1965年度（5代目委員長）は内田光一（東京神学大学）、1966年度（6代目委員長）は櫻井秀教（東京神学大学）でした。そして「守る会」の中央組織は1967年3月に解散しました。

※「福吉炭住での活動」とは

夏休みや冬休みを活用したキャラバン活動の限界を感じた守る会の創設者舩戸良隆は、1962年4月に福吉炭住での1年間滞在を決意したことでこの地における活動が本格化しました。舩戸は僅か1年間の滞在期間中に、子ども会、青年会を起こし、集会所を建設したのです。1963年4月から犬養光博、松崎一が舩戸に代わって1年間滞在し、「週刊福吉」を創刊しました。1964年4月からは山本将信が、後半から山下信治が引き継いで滞在しました。1965年4月から犬養光博は福吉炭住に戻り、福吉伝道所を開設して、「月刊福吉」を新たに創刊していったのです。

② シンポジウム「筑豊の炭鉱閉山期、『筑豊の子供を守る会』の活動を振り返る」について

2023 年 2 月 11 日、午後 1 時半から 3 時まで、福岡県立大学公開講座Ⅱとして、シンポジウム「「筑豊の子供を守る会」の活動を振り返る」を開催しました。シンポジストとしての犬養光博にはやや長めのスピーチをお願いすることしましたので、以下犬養光博のお話を中心に、シンポジウムの内容を紹介します。

犬養光博は、まず、自分が書いた『筑豊に生きて』（1971 年）が釜ヶ崎の小柳伸顕から批判されることから話を始められました。人間は自分の枠組みをもって物事や人を理解する。その枠組みを人間は超えることはできない。見たいものだけを見、聞きたいことだけを聞いている。そこで犬養は、以下の言葉を想起することから話を開始しました。すなわち、「歌は唖（むご）に聞け、道はめくらに聞け、理屈はつんぼに聞け」（鹿児島諺、上野英信『知の底の笑い声』より）です。

次に語るのが、『南ベトナム戦争従軍記』を著した岡村昭彦の「同情は連帯を拒否した時に生まれる」という言葉でした。次いで紙野柳蔵との出会いについてでした。紙野の訴えは「私はまだ人間に出会ったことがない」というものでした。カネミ油症者としての紙野は、当初、カネミ油症の会社社長に対し「元の体を返せ」と訴えていた。しかし、ある時、「元の体」とは、問題を考えることのできない体であったことに気付くことになったと言います。

そうした体には戻りたくはない、と考えるようになった、と言います。紙野は言ったそうです。「私は多くの支援者にあった、しかし人間とは会えなかった」と。

続いて犬養は長野丈吉さんのことを振り返りました。福吉炭住の住民であって、福吉炭坑の炭鉱主矢頭の息子の自宅の前でおらぶった。それは死んで行った仲間一人一人がいつ、どのように死んでいったかを告発するものでありました。長野さんは地域から迷惑がられ、こんな人は精神病院に収容してくれと言われ、直方の精神病院に入院させられた。その後自死したのです。この内容は『弔旗』1981 年 pp121-127 に、また本資料集成の第 5 巻 p351-352 に出てきます。長野さんは、なにが正義か正義でないかを身体化し、かつ根源的に告発していたものと解することができるでしょう。

続いて犬養は、福吉炭住でのクリスマス会のことを想起します。皆でクリスマスを祝っているときに、その近くで餓死しそうになっているおばあちゃんがいたことに気付き、自分は大変なことをしていた、という想いとなり、そのおばあちゃんに徹底して付き合うことを決めたと言う話をされました。入院したおばあちゃんは、ある時、腹にまいた帯から全財産としての紙幣を犬養に差し出したといいます。全財産を託されたという経験はこの時が最初で最後であったと言います。

また、福吉で M くんから「先生は 46 年間、嘘をつかないで過ごしてきましたか？」を言われたことを話しされました。犬養は県外就職する M くんに、いつも言っているように「仕事を変えるな」「嘘をつくな」と言ったそうです。M くんは「嘘をつくな」という教えを忠実に生きようとして、対人関係の困難さを抱えてきた人であったようです。

次の発題者は黒沼宏一でした。「守る会」の 3 年目の 1962 年に、黒沼は欠員補充のため「守る会」の活動に参加したそうです。青山学院チームの活動先は穂波町でした。黒沼にとっての 2 年目、1963 年の活動に継続して参加した学生チームのメンバーは 2 名のみであった、と言います。つまり、1 回だけの参加者がほとんどであった、ということになります。

また、1962 年と 63 年では筑豊はずいぶんと変わっていたといいます。63 年には生活保護が行きわたり、当初の窮状はなくなって、一見落ち着いてくるのです。黒沼によれば、ほぼ学生達の愛でで共有した課題意識は、このキャラバン活動は数日間で転々と活動場所を移動する活動ではなく、各大学チームが一定の炭住での定点としての活動になる必要はある、というものであったと言います。つまり、初年度の、1960 年夏の最初のキャラバン活動は合計 3 週間でありましたが、数日で炭住を移動する救援活動でありました。しかし、2 年目からは各大学チームは、特定の炭住を定点として 2 週間子ども会活動を中心にするようになり、その後も各大学チームは、同じ炭住で活動を継続することを方針としていったのでした。

この点で舩戸は、62 年から福吉炭住で 1 年間滞在を決意し、その後、福吉炭住での活動が日常化＝定点化していったことになります。こうした、活動をすべての大学チームができるわけでは当然ないわけですが、しかしながら、各大学チームは特定の炭住を定点として継続的な活動を、たとえ夏休み、冬休みの活動であって展開していくべきである、と黒沼らは

考えたと言います。夏キャラバンは子ども会活動が中心、冬キャラバンは、地域の関係団体との交流が中心ということでありました。

黒沼は振り返って言います。当時、「何かを為すか」より「生活の中で学ぶ」ということこそが重要と考えるようになっていった。しかし、今考えると、「学ぶ」という姿勢に奢りがあると感じざるを得ない、「学ぶ」ということではないのだ。ではなんと表現したらよいのか、適当な言葉が出てこない。子ども達に、「やさしくなれ」と諭しても子どもはやさしくはなれない。やさしくされることでやさしくなることができる。黒沼はある殺人者の国選弁護人となった弁護士の語りを紹介する。「人は人として生きられる源は、どんな育ちの環境であっても（すさまじい虐待、いじめ）信頼する人に出会えた体験があるかどうか！」。黒沼による結びのメッセージは「子どもたちが信頼する人に出会えたとう体験をしただろうか」であった。

櫻井秀教の発題は、「守る会」の活動をその起りから解散までの経緯をパワーポイントで整理報告され、活動内容について写真を通じて淡々と紹介するものでした。櫻井の委員長時代に「守る会」の中央組織は櫻井の手によって解散を宣言したのでした。櫻井は当時を振り返り、生活保護が普及することよって「問題が潜在化」するようになって、閉山炭住問題を惹き起こした原因を研究し、どう変えいったらいいのか、子ども達のどう係るべきかを学生運動として模索し、次第に各チーム、学生間で問題意識等が分裂し、全国統一組織としては1967 年 3 月に解散した、と説明されました。ただし、一部の大学チームの活動は継続したということも確かでした。

最後の発題者は本学の鬼塚香でした。「かかわり続けることにかかわる」という表現が印象的でした。細井と鬼塚が本資料集成の実質上の編集者なのですが、私＝細井が、「筑豊の子供を守る会」の関係資料だけでなく、服部団次郎による炭鉱犠牲者復権の塔建設運動や嘉穂福祉事務所の職員有志で刊行した『川筋』を資料集成に収録しようとしたことに、なかなか納得しないところがありました。しかし、今回、完成した『資料集成』全 8 巻を通じて読んで、全体が深くつながり合っていることがようやく理解できるようになった、という話をしていただきました。

以上、本シンポジウムには 76 名の参加者を得て盛況のうちに終えることができました。関係者からのコメントとして河野（旧姓丸木）郁子は、ICU としての活動が他大学のチームとはかなり異質なものであったことを説明されました。本資料集成を刊行した六花出版社長山本有紀乃にも話をしていただきました。

③　公開講座Ⅱの終えての座談会（於附属研究所大セミナー室）について

15 時過ぎから 16 時半まで、会場を附属研究所大セミナー室に移し、座談会を開催しました。参加者は 38 名でした。司会進行は引き続き細井勇が務めました。最初、会場から、質問や意見、感想を出してもらい、それを受けてシンポジストに回答いただく形で座談会を進めました。

最初の発言を本学者の出身者で現在鹿児島大学の教員となっている社会教育史の農中至にしてもらいました。農中は、この「守る会」がキリスト教ミッションであったということの制約や限界を指摘し、自治体行政に如何なる影響を与え得たかを質問されました。

種々の意見の中で、特別印象的であったのは、同志社チームとして参加した山本信夫の発言でした。山本は卒業後、県立児童養護施設田川湯山荘の職員となりますが、行政関係者に「守る会」のことを知っているかと聞くと、皆知らないという。「守る会」の活動はほとんど行政関係者には知られていなかったことを語りました。地域住民にとっても炭住は近寄り難い地区であり、当然、「守る会」のことを知らない、という人が多いのです。地域住民から近寄り難い炭住に、そこに外部から学生が入り、活動する、しかもそれはキリスト教的ミッションによる活動であったことになります。炭住の住民には、「お前達はうちの子どもらを洗脳するのか」と詰め寄る場面もあったと言います。種々説明するとその住民は理解してくれ、最後にはお世話になっている、という話になったということでした。

1960 年に刊行された土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』は悲惨な炭住の実情を世に知らせることになりました。しかし、その写真の姿＝炭住の姿が筑豊そのものの姿のように外部に知られることになってしまった、ということを多くの地域住民は批判的に見てきたことが参加者の意見から知ることができました。筑豊は、土門拳の写真集によって筑豊は悲惨な場所というイメージが定着することになった、そのことを地元の人はにがにがしく思っている、ということです。筑豊は人情味あふれる地域社会なのに、というわけです。こうした地域住民の人々と炭住との間には断絶があった、ということになると私=細井は思います。学生達は、外部の人間、学生として炭住で活動したのでした。そうした「守る会」の活動は行政関係者からも、多くの地域住民にも知られない存在であった、ということになります。そしてそこには構造的な要因があったことになるかと考えました。こうした問題が、山本信夫の証言から改めて浮かび上がったのでした。

「守る会」の活動とは、子ども会活動を中心とするものであったのであり、学生達だからこそできた「遊びの空間の創造」であったのだと思います。それは親達にはできないことであったと思います。炭住の親達には複雑な感情があったのではないだろうか。自分達にできないことを学生達がしてくれている。それには感謝する。と同時にある親はこれまでの子どもとの関わり方を反省する。しかし、多くの親は、自分の子育てや教育能力のなさを突き付けられるようで、有難いと思うと同時に、責められているようで、反発したくもなる心情になったのではないだろうか。

謝辞

以上、2 年間の COC 研究の成果として、「筑豊の子供を守る会」関係資料集成を予定通り刊行でき、こうして公開講座を開催できたこと、それが貴重な意見交換の場となり、新たな気付きや発見の機会となりましたことは、関係者のご協力、ご支援の賜物です。改めてここに感謝申し上げ、公開講座の報告書としたいと存じます。（細井勇）

2.　参加者状況

今回の公開講座では、田川近隣地域及び国内から、教育機関・福祉機関・企業等にお勤めの方や、学生・地域一般の方など、シンポジウムに 76 名、座談会に 38 名の方にご参加いただきました。

シンポジウムアンケート結果（回答者 56 名）

今回の公開講座Ⅱを知ったきっかけ（複数回答）

知人の紹介	30	54%
チラシ	13	23%
新聞	8	14%
その他	6	10%
大学ホームページ	4	7%
田川市ホームページ	1	1 %
未回答	1	1%

シンポジウムの印象

大満足	22	39%
おおむね満足	22	39%
普通	4	7%
やや不満	1	2%
未回答	7	13%

今後の本学の公開講座へ参加したいか

はい	34	61%
わからない	14	25%
その他	3	5%
いいえ	2	4%
未回答	3	5%

座談会アンケート結果（回答者 21 名）

座談会の印象

大満足	7	33%
おおむね満足	12	57%
普通	1	5%
未回答	1	5%

◆いただいたご意見やご感想のいくつかを紹介いたします。

（シンポジウム）

- 今回の「筑豊の子供を守る会」に実際に関わった方々のお話しを聞くことが出来て、本当に貴重な活動を聞くことが出来感謝でした。この筑豊の炭鉱閉山の時期は日本にとても大きな変動期で国が混乱したのだろうと想像できます。
- 学生キャラバンの「筑豊の子ども」支援を通じたリアルな活動経緯のお話しをお聞きして感動しました。
- 筑豊在住ながら知らないことばかりで大変勉強になりました。ありがとうございました。県立大学ならではの公開講座であったと思います。フロアーからの発言もとても参考になりました。重ねてお礼申し上げます。
- 多くの方の善意に基づく取り組みに敬服しますが、焦点をもう少し明確にしてほしいものの、こうした公開講座が継続されることを願っています。

（座談会）

- 参加者の問題意識に大きな違いがあり、うまく議論がかみ合わなかったと思う。しかし、多面的にこの働きの大きさとそれに関わった方々のその後の生き方が多くの人々を一人を大切にする命に向き合う生き方へと背中を押してきたことを深く思いました。このような機会を与えられ、心より感謝しています。

◆今後に向けてのご要望（テーマや内容など）のいくつかを紹介いたします。

- 筑豊の近代や現代について、未来に向けて
- 支援を受けた子供達と手を差し伸べで活動した相方からの話しを聞きたいと思った。
- 子どもをテーマにした講座
- 環境が人を育てます。今後の子供達が育つ環境をどのように？というのが私達大人がこれから考えるべきではないでしょうか？

ご参加いただきましたみなさま、どうもありがとうございました。

（福岡県立大学附属研究所公開講座Ⅱ担当者一同）

※　本公開講座は、田川市・福岡県立大学包括連携協定に基づき、田川市から一部助成を受け実施しました。